

# 全校道徳 心の成長を目指して

9月6日（火）の全校朝会の場で、全校児童に向けて、下記にある「一粒のぶどう」というお話の朗読をしました。

少し昔、ある不治の病の女の子の話です。  
一歳の時から入退院を繰り返して、五歳になりました。  
様々な治療の甲斐もなく、ついにターミナルケアに入りました。  
もはや施す術もなく、安らかに死を迎えさせる終末看護、それがターミナルケアです。  
冬になり、お医者さんがその子のお父さんに言いました。  
「もう、なんでも好きなものを食べさせてやってください」  
お父さんはその子に、何が食べたいか、ききました。  
「お父さん、ぶどうが食べたいよ」と、女の子が小さな声で言いました。  
季節は冬、ぶどうはどこにも売っていません。  
でも、この子の最後の小さな望みを叶えてやりたい。  
死を目前に控えたささやかな望みを、なんとか、なんとかして叶えてやりたい。  
お父さんは東京中のお店を探しました。思いつく限りのお店、あのお店も、このお店も、、、足を棒にして、探し回りました。  
でも、どこのフルーツ売場にも置いていません。最後に、あるデパートのフルーツ売場を訪ねました。  
「あの…、ぶどうは置いていませんか？」  
祈る気持ちで尋ねました。  
「はい、ございます」  
信じられない思いで、その人のあとについて行きました。  
「こちらです」と案内されたその売場には、きれいに箱詰めされた、立派な巨峰がありました。  
しかし、お父さんは立ちすくんでしまいました。なぜなら、その箱には三万円という値札が付いていたのです。  
入退院の繰り返して、そんなお金はもうありません。悩みに悩んだ末、必死の思いでお父さんはその係の人に頼みました。  
「一粒でもいい、二粒でもいい、分けてもらうわけにはいきませんか？」  
事情を聞いたその店員は、黙ってその巨峰を箱から取り出し、数粒のぶどうをもぎ、小さな箱に入れ、きれいに包装して差し出しました。  
「どうぞ、二千円でございます」  
震える手でそのぶどうを受け取ったお父さんは、病院へ飛んで帰りました。  
「ほら、おまえの食べたかったぶどうだよ」  
女の子は、痩せた手で一粒のぶどうを口に入れました。  
「お父さん、おいしいねえ。ほんとにおいしいよ」  
そして間もなく、静かに息を引き取りました。



これは、作り話ではなく本当にあったお話になります。聖路加病院という病院に入院していた女の子とその父親、そして、高島屋というデパートの店員さんのお話です。高島屋は、この出来事をきっかけに「一粒のぶどう基金」という、従業員の様々な社会貢献活動への支援を行っているそうです。

子どもたちには、教室に戻ってから担任と一緒に、女の子のお父さん、そして、デパートの店員さんの気持ちや行動について考えてもらいました。

お父さんに対して…

「子どもが病気でかわいそう」「娘の最後の願いを叶えてあげようと必死だった」「娘のために一生懸命頑張っていた」「いい思い出を残してあげたい」など、娘に対する優しさを感じたようでした。

デパートの店員さんに対して…

「お父さんの気持ちを考えていた」「お父さんのことだけではなく、娘の役に立ちたい」「(ぶどうを) 本当に必要としていることが分かった」「お金よりも大切なものがあると考えていた」「勇気がある行動だった」など、相手に対する優しさだけではなく、人として大切なことがあるということを感じたようでした。

子どもたちは、単に“かわいそう”や“優しい”ということだけではなく、お父さんや店員さんが、相手の置かれている状況をしっかりと認識したうえで、相手に共感し相手意識をもちながら取っていた行動だったと、考えてくれたようでした。子どもたちの中には、「悲しいけれど、優しさがつまっていたってすてきな話だった。」という意見もありました。保護者の皆さまにも、ぜひお読みいただき、もしよければお子さんと話題にしていだければと思います。

子どもたちの道徳性を育むためには、ご家庭の役割が極めて重要になります。子どもたちとのかかわりの中で、人として大切なことを教えていただきますよう、ご協力をお願いいたします。